

---

# 灰の龍は退屈が嫌い

白色野菜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

灰の龍は退屈が嫌い

### 【Nコード】

N2659Y

### 【作者名】

白色野菜

### 【あらすじ】

死んだ女性が龍に転生させられたあげく、神様にとある使命を押し付けられ、しぶしぶ生きてくだけのお話

ただいま文章改正中。文法ミスの訂正と描写の追加が主です

## ブローグ？（前書き）

誤字脱字感想は全力で受付中

## プロローグ？

むかしむかし

世界がまだ、有限であつた頃のお話

あるところに、一匹の龍が居ました

龍はとても気高く、孤独を好みました

高い高い山に住んで、人々を長い間見守っていました

ある日、その龍のもとに勇者が現れます

龍は勇者の清き心に触れその優しさを認め

力を貸すため勇者と共に魔王を倒す旅に出ます

長い旅の果てに、とうとう勇者は魔王を倒すことが出来ました

龍はその終わりを見届けると、満足げに笑みを浮かべ

その、巨体を横たえました

龍は、勇者を庇い魔王の最後の呪いを受けていたのです

龍はどんどん弱っていきます

勇者が必死に命を繋ぎ止めようと、手を尽くしますが

龍は穏やかに命を終えました

勇者は龍の形見にと、龍の亡骸から鱗を3枚取りました

すると、なんとということでしょう

鱗は光輝き、それぞれとても美しい女性の姿となりました

勇者は彼女たちを連れて、故郷へ帰ります

故郷は勇者が帰ってきたことに驚き

英雄の帰還にとても喜びました

そして、勇者が連れて帰った女性たちを  
龍の巫女と呼び、丁重に歓迎しました

それから、勇者は小さな国を作りました

王妃は勿論、龍の巫女達です

そして、勇者達はその国で末永く幸せに暮らしましたとさ

## プロローグ？

私は死んだ

過程は大した意味を持たないので、語るのは止めよう

私の体は、火葬され骨と灰になった

私の魂は、浄化のため業火に焼かれた

残ったのは

転生できる真つ白な魂と、燃え落ちた記憶の灰

どちらも私という自我を形成するのに重要で

それらが二つに分かれたなら、私という人間は終わるはずだった

白い魂は、新しい輪廻へと旅立ち

黒い灰は、世界の肥やしとなるため混沌へとまかれた

私の灰は世界と混ざり、ほんの少しだけ世界を変容させた

その、変容が、まずかつたらしい

その歪は、とても小さいが人がもたらした物である為、神々は排除できない

その歪は、世界が科学しか持たない為、人々は排除できない

その歪は、周りの灰を飲み込み一つの現象と理を世界へ持ち込んだ

それは、いずれ『魔法』へといたる理だそうだ

それは、遠い未来『神』を生み出す種だそうだ

それは、神々にとって驚愕に値し

それは、神々が私へ興味を向けるのに十分な理由だった

灰は混沌から取り出され、白い魂に降りかけられる

私という自我は何度かの輪廻の後、復活することとなった

そして、神々は私を前に一つの相談をし、私の許可なく一つのことを決めた

私はどうやら、これから死ぬために生き返らないといけないらしい

## 落下

頑張つてこいと放り出された

空に

かなりの早さで落ちているのか、自分の体が空気を切る音が酷く五月蠅い。肌を刺す冷気がこれは夢でないと意地悪く伝える。もつとも、そんな事教えてもらわずとも知っているが。

視界をうつ伏せの状態で落ちているので地上が見える。草原よりも森が多い景色、森の多くは赤や黄色に姿を染めている。相当高度が高いのか、地平線が丸く見えた、此処は星ではあるようだ。その類似点に少しだけ安心する。

これだけの高さなら、まだ衝突まで余裕は有りそうだ。

周囲が暗いので、恐らく今は夜なんだろう。視界には村らしき灯りの束は見つけられない。

科学がなく魔法がある、とは聞いていたので明かりぐらいはあると思つたのだが。あまり一般的では無いのか、それとも今が誰もが寝静まる時間なのか。今の私には判断が付かない。

幾つかの雲を突き抜け、地上も大分近づいた。そろそろ動き出さなければ、かなりの痛手を負うことになるだろう。それは死には遠いだろうが、回避できるのなら余計な痛みは忌避すべきだ。



本当に久しぶりに身体を動かしたせいか、動きがやたらとぎこちない。それでも身体を動かしていけば、ずいぶん動きもスムーズになる。身体についた霜も大分落とせた。

それから、深呼吸。

人間には無い、器官を動かさないといけない。鳥の羽とはまた構造の違うその羽は、腕ではなく肩甲骨の延長線に生えたものだ。前世の記憶が邪魔をしないことを祈りつつ、大きな羽を広げる。

瞬間、翼が風を受け止め大きなブレーキがかかる。エレベーターが停止する際の圧縮感を全身に感じ、一先ずの成功を認識した。

羽が風圧に負けて、痛みを覚える事まで覚悟したというのに結果は大変順調なものだ。

まあ、成功とは言え、まだ翼を広げただけだ。

精々、落下が緩やかになるだけで空を飛んでいるという状態には程遠い。方向のコントロールが出来ていない分、滑空よりも劣るだろう。

それならば、と。

翼で空気を抱え込み、地上に向かって押し出してみる。イメージは水泳のバタフライより抜粋。

水よりも手応えの無い感触の中、力強く何度か羽ばたくと不意に確かに空気をつかんだ感触が翼から伝わる。

一度押し出しただけで一瞬体が重力から解放され、浮遊感が身体を包む。それから一泊の後、また重力に捕まり落下が始まる。落下の勢いがつく前にもう一度押し出すと、今度は簡単に落下は上昇に

変わる。

それから何回か羽ばたいて、高度を確保した。これならば、思考に沈んでいる内に地面に衝突することも無いだろう。

さて、何処に行くか。

この姿で人里がある可能性のある平地に降りるわけにはいかない。森も、自分の姿が隠れきるような木々は少ないだろう。仮に隠れる場所があったとしても、移動のたびに木を倒すことになりかねないとなると、海か山。

……山にしよう。

視界を巡らせればとても大きそうな山が見える。予測なのは、山までの距離感が掴めないからだ。途中の景色でも比較対照になりそうなものは見当たらない。

かといって、近くの山々では少し小さい。あの程度だと人間が簡単に入り込んできそうだ。

夜が開ける前にたどり着けることを誰かに祈り、今度はクロールのイメージで空気を後方に押し出す。今度は一度目の挑戦で風を掴む事が出来た。慣れるのが早い、龍の本能の補佐もあるのだろう。

一度羽ばたくと、風を裂きまた受ける姿勢へと自然となった。これなら時たま羽ばたくだけですみそうだ。速さもかなりの物なので、心配していたように人間に見つかるような事態には、ならないだろう。

目だけではあるが目処がたてば、飛行を楽しむ余裕も出てくる。翼を羽ばたく度に風を掴み又切る感触は心地いい。

景色も単調ではあるが、中々見れないものではある。そもそも日本にはこんなに森が残った場所はあっただろうか？

何時かアクロバット飛行に挑戦してみるのも悪くないと思いつつ、私は一時間の夜の散歩を存分に楽しんだ。

近くで目的の山を見た私は、その巨大さに神聖すら覚えた。

昔の人間が山を未知なる物として崇め、奉ったのも頷ける。その山は、確かに人を気後れさせるような雰囲気を感じていた。雲を突き抜け、佇む姿は確かに神でも住んでいそうだ。

寒さを堪え、上空から山頂付近を見渡してみると火口は無い。ひとまず、頻繁に噴火をする山で無いことを確認し、中腹辺りまで高度を落とす。それでも木々は生えない高さだ。

山頂は、寒い。本当に短い間しか居なかったのに、すでに私の身体は芯から凍えていた。確かに、人間は来ないだろうが、あんな不便な場所に住む気はない。私はラスボスでは、無いのだから。

中腹を一周してみる。木々は無く、赤の混じる地面が荒廃した土地を思わせる。それでも、わずかな岩の隙間に草花は生えているようだ。

視界を遮るものは少ないが、私が落ち着いて住めそうな場所は発見できない。洞窟があっても小さく、私が入るのにはかなり窮屈だ。だからといってこれ以上、麓に近づくのは勘弁したい。人間の集団とはなるべく係わり合いになりたくないのだ。

夜の闇のせいで見逃したのかもしれないと、もう一度ゆっくりと飛び、住める場所を探す。これで見つからなければ残念だが人間に見られるリスクの中、何処にあるかも解らない海を探しに行かなければならない。

そんなことを考えていると、視界に違和感のある岩陰が映る。やけに、影が大きいのだ。

近づいてみると、それは岩陰ではなく洞窟の入り口だった。ネズミ返しのように張り出した岩の下に、ぽっかりと入り口があったので、一度目は見逃してしまったようだ。

覗きこんだ感じだと、大きさも申し分ない。問題は中を崩さず着陸出来るかだったが、本能補正でそれも、どうにかなった。

翼を折り畳み、改めて洞窟を見渡す。外と同じ赤っぽい土が洞窟内の壁のようだ。その壁の色を多い尽くす様に、青白く光る緑の苔がびっしりと生えていた。見渡す限りだと、地面の色よりも緑の分布が多い。

洞窟内は、苔のおかげで夜であるにも関わらず薄ぼんやりと光っている。月明かりには負けるため、外から目立つこともなさそうだ。洞窟の外や、他の洞窟には全く生えていなかったというのに何故この洞窟だけに生えているのか？疑問は沸くが、答えは近くには転がっていない。

体で貴重そうな苔を削ぎ落とさないように、注意しながら奥へ進むとだんだんと苔の光が強くなる。行き止まりまで行くと、其処はまるで満月の夜のように明るかった。

行き止まりには小さな湖があり、それが苔の光を反射して壁に美しい水紋を描いている。湖を覗きこむと、魚もいる。水草が揺れているところを見ると、水の流れがあるようなので、もしかしたら底の何処かに地下水の水路でもあるのかもしれない。

それにしても、すごい透明度だ。

どうやら底はすり鉢状のようで中心の底は見えないが、浅瀬は、はつきりと見ることができる。

気が付くと、水面に今の自分の姿が映っていた。

私の鱗の色は灰色だ。蜥蜴のような細かい物ではなく、蛇や鎧を連想させる硬質な質感。悪趣味な色だったら、此処で泥を浴びていこうと思っていたので、手間がひとつ減ったことに安堵する。

瞳は黒、白目があり安心した。だが瞳孔は確かに爬虫類の縦に割れたそれだ、この程度なら許容範囲ではある。

口を閉じていれば牙は露出しないようだ。角はなく、本当に騎士に退治されてしまいそうな西洋竜だ。

高さは5メートルほど。尾や羽を広げれば倍以上になるだろうが、ここで確かめるわけにもいかない。せつかくの便利な住処を好奇心で失ってしまうのは惜しい。

神曰く、飯は必要でないらしいので巨体を維持するために狩りに出

掛ける必要はなさそうだ。

生も丸焼きだけの食事も勘弁したいので、これには、感謝してもいい

さすがに洞窟内で翼を広げる事は出来ないが、それさえしなければ閉塞感を感じることも無く、この洞窟で快適に過ごせそうだ。

目先の目的が無くなったからか。

急を有する問題が無くなったからか。

もうしばらくこの景色を楽しもうと思いい立ち、魚を脅かさぬようにゆっくりと湖の辺で身体を横にする。

水の音に静かに耳を立て、まどろみのような休息を

## 冒険者の場合（前書き）

冒険者の場合と酒場での相対を繋げました。  
騎士の場合は一旦消しました。

## 冒険者の場合

耳を済ませ、上空の気配を探るが龍が戻ってくる気配はない。無意識に、止めていた息を吐き出すと、緊張の糸が切れる音が聞こえそう。てか、切れた。絶対きれたなんかの糸が。

「おいおい、嘘だろ…。」

俺の呟きは誰も聞いちゃいない。聞かせる気も無い。

俺は今、高地にしか咲かない薬草を求めてこの山に一人で登っているところだからだ。今は一人で入ったことを猛烈に後悔している。今見たことを俺一人が言ったとこで、誰も信用しないだろうしな。いや、集団でも同じか。

一人で居たから、見つからなかったということにしよう。

それにしても、龍か。

この山は確かに高いが、なぜか魔物も少なく麓の森も実が多い。そのおかげで麓の村は此処何十年かは飢えで死んだ奴を出したことが無いらしい。

…そんなことは、今はどうでもいいか。割と俺も錯乱しているらしい。

「まさか、龍がすんでるとはなあ…。」

いや、今まで目撃も報告も無いって事は余所から来たのか？」

獣避けの結界だけで、火をつけないで寝てたのが幸いだっただけ。本当に。



隠れ場所がないこの荒れ地で見つかったら、あつという間に腹の中だ。自分の思考に顔を青する。

月明かりがあるとはいえ、視界は悪い。色は確認できなかったがあのシルエットは確実に龍だろう。奇跡的な飛び方をした鳥の群体だったという落ちは無いだろ？…さすがに。

まさか、東の凶龍がこっちに來た訳じゃないだろうなあ…。そんなことになったら、この国を出ることも考えなきゃいけなくなる。これから起こる事を考えると本当に憂鬱だ

「こりゃ、依頼どころじゃないなあ。

取りあえずは下山だな。」

手早く広げていた荷物をまとめる。

夜に下山なんぞ自殺行為に等しいが、龍の居る山で一晩過ごすよりはましだろう…多分。

纏めた鞆を背負い、両手を空ける。魔物が少ないとは言え、居ない訳じゃない。特に今は注意をしてもしても過分になるような場合じゃない。

体に馴染んだ装備を確認した後、早足で山道を駆け降りていく。かなりのハイペースだが、休憩を挟む気は無い。なんせ命がかかっている、体力なんて無理やり絞り出るもんだ。

龍の気配のせいか、踏み込んだ森は不気味なほど静かった。

「……飯ぐらいゆつくり食わせてくれよ、村長。」  
足を棒にして入り口の坊主に支えられながら、ようやく酒場について一息つけたってのに何なんだよ。

「そんなこと、言ってる場合じゃないだろう!」

「俺のエアール……」

「後で樽で飲ませてやる!早く話せ!!」

近い近い、唾飛んでくる。

ほんと、ようやく一息ついたってのにさあ……なんで、血走ったじじいの顔に迫られなきゃいけないんだ?

文句は浮かぶも、樽一つのエアールは大変魅力的だしなあ。

多くの冒険者の類に漏れず、俺も酒が好きだ。特にこの村のエアールは旨い、どうやっているの知らないが冷えたのが出てくるしな。

結局、喉の奥から出てきたのは、溜め息一つ

「えーあー、龍が居た。以上」

非常に簡潔で的を射た報告であると自負できる。

「何時何処でそのまま飛び去っていったのか？」

俺が聞きたい、飛び去ったならその方角の仕事は死んでも受けん。

「知らん、通り過ぎたかどうかは近すぎてわからなかった。だが、

確かに森の様子はおかしかったなあ……。」

「動物がいなくなってたのか？！」

「いや居た。ただ静かだったなあ。」

魔物の遠吠えすらなかった、不思議だ。奴らの理性なんてとつくの昔に消えてるはずなのに。

それでも、絶対的強者の気配には怯えるって事か？

龍に関わらず。大型の魔物が巣を作るとその発見と特定は簡単だ。

なんせ、奴等が住み着いた場所からは、生き物達が居なくなる。

動物も植物も関係なく、地面の土も干からび50年は作物が生えなくなる。

そついうのの事前調査は金になるから何度かやったことはあるが、今回はどーも何処かそついう場所とも雰囲気が違う。

木々が枯れ始めていた様子もなければ、鳴き声こそあげていないものの、鳥だって居た。見かけては無いがたぶん他の生き物もあの森にいるんだろうなあ。

「……どういふことだ？」

「だから、しらねえって、俺も見んのはじめてだし。

……だがまあ、ここで、エールを飲む余裕がある程度には、安全な気がするなあ。」

「根拠は」

「あるわけないだろ、勘だ」

強いて言うなら、あの龍に狂気を感じなかった程度の理由だしな。そんなのを村人の命を背負う、村長に言えるはずがない。

「ならいつそう、山に一人調査にいかないか？」

報酬は、払う。」

何、言っただこのくそ爺

「嫌に決まっただら？」

俺の勘が鈍ってるだけかも知れねえしなあ。」

「いえ、貴方には調査に同行していただきます。」

聞いたことのない声と共に机の上に財布が一つ投げ出される。

重い金属が擦れる音を布越しに、耳にしつつ投げた相手を見る。

騎士だった。

こんな辺境で見かけるなんて珍しい。思わず、まじまじと見るが確かに王都で見かける、騎士の鎧を身に纏っている。

髪は茶色、瞳は鳶色。顔はまあ平凡よりかは上かもしれないが、張り付いた笑みが気味が悪い。

じつくりと観察してから騎士と瞳を合わすと、背中が粟立つような感覚に襲われる。

……本気で勘が鈍ったのかもしれない

「で、こんな所に騎士さんがなんのご用だい？」

「貴方が龍を山で見た冒険者ですね？」

情報が漏れてるしさあ……。

面倒ごとは御免だからなあ、案内係にも広めるなと念押ししたはずなのにな？他にも誰かに森から出るところ見られたかあ？

「そつだ、と言っただら？」

「そのなかに、金貨二十枚入っています。」

前金です、調査の依頼を受けてください。その調査に私も同行させていただきます。

達成後、もう二十枚支払いましょう。」

「につー！」

絶句してるのは、村長。金貨二十枚と言ったら、農民が一生働いて稼げるか否かの金額だ。

そりゃ、絶句もするよなあ。おれもびっくりだ。受ける気はさらさら無いが。

そんなことを考えていたら、騎士の瞳が細くなる。

「国から認可を受けている冒険者さんですと、私には直接その労働力を徴収する権限がありますが…。」

土気の問題もありますし、どうせなら依頼を受けていただきたいのですが……。」

こいつ、団長クラスかよっ！なんで一人でこんなところに居るんだ？てか、間が悪すぎるっ！！

嘘の可能性は、装備見る限りかなり低いしなあ。唯の貴族の坊ちやんかと思っただのに…っ！

「……前金十枚でいい、代わりに依頼内容にお前の警護を含めないでくれ。」

龍が出たら真っ直ぐに俺は逃げる。」

金は惜しいが、命のほうが大事だ。これでも駄目なら、本気で他国に行こう。国に逆らって逃げ切れるかは、この際おいといて。

緊張で湧き出た唾を飲み込む。

「……いいでしょう。なら、契約成立でよろしいですか？」

安堵の表情を、表に浮かべないようにしつつ頷く。

本気でいやだけど、この際この譲歩でも破格なんだろう。

「で、何時でるだ？」

「今すぐにでも…と、言いたいですけど明日の早朝でよろしいですか？」

「わかった、そんじゃそれまでに契約書を纏めておいてくれ。」

依頼用の紙とペンは村の入り口の案内が…道具屋が持つてる。」

「ええ、用意しておきます。………ああ、忘れていました。貴方の名前は何ですか？報告に必要なので。」

契約をする以上、逃がさないってか？

「アレン……アレン＝ジオスツール」

「わかりました、アレンさん。それでは、良い契約にしましょう。」

そう言っただけ騎士は机の上の財布を回収してから財布の中からきちり金貨を十枚取り出し、俺の前に置く。掴んで投げ返したくなる衝動を抑えつつ、鈍く光る金貨を見る。

身を翻して出口へと去っていく、その姿も様になってるのは流石は騎士様。

未だに硬直して金貨を凝視している村長を横目に、俺は金貨を一つ摘み上げる。

其処には、この国の旗にも記されている双頭の蛇が刻み込まれていた。

## 言訳（前書き）

言訳と原料採取をあわせました。

## 言い訳

暇である。

引きこもりという物が存在するのは、動かずとも外部から情報が入ってくる場合のみ、甘美な怠惰を受諾することができるようだ。現状ではただの監禁に近いので中々に苦痛だ。

あまりの暇さに、ひたすら湖を眺めるといふ苦行を始める程度に暇だ。

この状態が後1週間も続けば私はもしかしたら退屈に殺されてしまいかもしれない。

ここから外は見えない。日の光も月の明かりも感じることはできない。

更に、私は空腹を感じることも無いので此处でどれくらいの時間を過ごしたのかもわからない。まあ、まだ1日2日だろう…恐らく。

外に出たくとも、昼間に飛ぶのは目立つ。夜もよくよく空を見ると月が二つあり、昼間ほどではないが明るい。

初日、誰にも見られていないといい。もつとも、仮に見つかっても出入口は絶壁なので滅多な事では登って来れない。これなら大丈夫だとは、思うが。

私は、害をなす気はないが、善をなす気も無い。私はあくまで私のためにこの力を振るいたい。ならば人に関心を持たないのが一番だ。その為には、人に会わないのが一番いい。

仮に遭遇してしまえば、私は甘い日本で生きた人間だ。



恐らくはありあまるチートを使い、お節介をやいてしまっただろう。別に自分が善人だと言う気はない。まったく無い。そもそも私は根悪説主義者だ。

ただ、日本で悪とされているものを見逃せば、私は罪悪感を感じるだろう。

それが嫌なだけなのに。その罪悪感から逃れるために私は善を働くのに。

それだけで、私はお人好しという分類に入ってしまうらしい。まことに不本意だ。

次に思うのが。

目の前に死体があつたら、私はどうするかという話だ。

転生前なら、すぐさま警察を呼ぶ。

以上だ。

それ以上の行動は無意味であり無価値でもある。素人に何をしろというのだ、探偵であるまいし。

多少、他者の死に引きずられ落ち込むかも知れないが、一晚寝れば直るだろう。

見知らぬ他人の死などその程度の影響しか人には残せない。

まあ。

幸か不幸か最初に対面した死体は自分のものだったが。

だが、今なら私は他者の死を塗り替えられるかもしれない。このチートを使って。

それは、死への冒涇であり禁忌と呼ばれる行動で悪である。その理

由も意味も私は十分すぎるほど知っている。

大きな力を持つ私が悪へと傾くと大きな恨みと破壊を生み出し、ろくな死に方ができないに違いない。

だが前述した通り自分の力で助けられるものを見逃せば、私は罪悪感を感じ後悔する。

人の命の後悔だ。それはとても重く、苦く、私は耐えられないかもしれない。

いや、恐らくは耐えられないだろう。

どちらも同じ程度のリスクとメリットがある場合は、私はその時の気分でものを決める。

つまりだ。

暇で暇で暇な時に。

目の前で水を血で濁らせながら死体が浮かび上がってきたのだとしたら。

好奇心の赴くまま、治療を試みるのは当たり前前の行為であり。

私は悪くない。

言い訳を考えるとという現実逃避も済ませ、瞳の焦点を合わせ、死体を直視する。

なるほど、確かに肌色の赤は血の色だと実感できるほど、死体の肌は白い。象牙という言葉も遠く蠟のような肌が、最も近い。

水死体は見かけがかなりグロテスクになると言うが、この死体はそうでもない。

血こそ流れ出ているものの、顔なども擦り傷があるのみで綺麗なものだ。幸いなことに。

死にたてだからか、死因が違うのか。

手元に寄せて眺めてみたいが、残念なことに私の手は非常に不器用そう。この手では爪で死体を真つ二つに切り裂きかねない。

……変身、するか。

微細なイメージが必要だが、残念なことに前世の私は人の外見に頓着しない質だったので自分の顔一つとっても、明確に思い出すことができない。

別段それで不自由を感じたことが無かったので、今始めてナルシストが羨ましいと思う。

ひとまず、仮の姿ということで目の前の死体の姿をいただく。

見本が目の前にあれば、とんでもない失敗もしないだろう…恐らく。肌の色だけ黄色人種に設定することを心がけイメージする……死体の白はさすがに頂きたくない。

………光が集まるエフェクトも終わり。  
眩しさから閉じた瞼を開ける。

手足を見るとどうやら成功したようだ。  
肌の色も、見慣れた色になっている。

そして大変好都合なことに、服まで再現されている。ややサイズが  
大きいがそこまで気にするほどではない。

死体に開いた大きな腹部の傷も、再現されることなく服にも穴や  
血の赤は付着していない。

内蔵の一部が顔を覗かせるような事態には陥らなかった。

武器と鎧も無いようだが、これから死体をとるため泳ぐのだ。

それらは重く、邪魔になるだろう。洋服も邪魔そうだが…まあ、平  
気だろう。

足先から伝わる水の冷たさに体を震わせ、死体をとるため冷たい水  
へ飛び込んだ。

空気とはまた違う抵抗が体を包み込む。

………あつ、準備運動忘れた。

## 下捲え

寒い

服が水を吸って重い

身体能力は上がっているのに、風邪を引くことは無いだろうが寒い

火の付け方は知らないの、ひとまず置いておく

地面に横たえた、死体を見る

見事な赤毛、瞳の色は解らず眠っているようにも見える  
細かな傷が付いた鞘に収まっているのは両刃の西洋剣  
所謂、ロングソードというものが

服を捲ると、大きな傷が腹部にある

医者で無くとも、死因の一つがこの傷であることは明白だ  
なにせ、背中まで貫通しているのだ

他殺なのだろうか？傷の原因は解らないが自殺ではなさそうだ  
それだけ解れば十分だ

血はもうあらかた出尽くしたのか、出血が緩やかになっている  
死後硬直は始まっていないので、本当に死にたてなのだろう  
そもそも、さっきまで血が流れていたのだからそれも当たり前か

かろうじて肩に引っかかっていたリュックサック型の荷物を漁ると  
応急処置用であろう包帯と塗り薬、消毒液等が出てくる  
傷口が露わになっているのも、あれなので消毒液を適当にかけてから包帯を巻いて行く

やや大きな人形遊びを終えると、一息ついた

これからやろうとしていることを考えると心が弾む

まずは、もう一度湖に潜らなくては

山の中にある湖なのだから、きっと見つかるはずだ

今度はきちんと、屈伸をしてから湖に飛び込んだ

## 行使

この身体は、呼吸を必要としないらしい

水に潜っている際に、気付いた

どこまで化け物なんだ龍<sup>わたし</sup>

あまりにも、騒がしくなった場合の逃げ場として海底を候補に加える  
目的の物を見つけ、水から上がる

死体はあくまで動かず死体として存在していた

どうせファンタジーなのだから、瘴気だの魔気にだの侵されてゾン  
ビにでもなればいいのに

現実がどこまでも現実じみでいて面白みが無いのは、前世で十分だ  
というのに

私の服や髪から、水が滴り水溜りを作る

体温を奪いながら滑り落ちる、水滴を拭い髪を絞って・・・目の前  
をちらつく前髪の色に首をかしげる

死体を見る

髪を見る

見難いので、二三本纏めて引き抜く

・・・灰色だ

鱗と同じ、灰の髪

道理で違和感があり無いわけだ

視界に赤がちらつけばさすがの私も気になるだろう

疑問を感じ、もう一度湖に近づく

水鏡に映る姿は女性だった

灰の髪は肩よりやや上、瞳の色は鈍い金

目じりは下がり、ひどく退屈そうな印象を与える

私に顔の美醜の判断は付かないが、まあ不細工ではない、と思う  
通りで、姿を移しただけにしては腕が細いと思った

服装は死体と同じ服だ

其処は同じらしい・・・イメージが足りなかった時のための  
初期設定か何かだろうか？

まあ、いい

私の顔などどうでもいい  
二本足で指が五本あって腕が二本ある、ぱっと見人間であれば動く  
のに支障は無い

今度こそ、死体に近づく

そして、両手に抱えた物を死体に振り掛ける

一センチから二センチの小さな粒たちが、ヒカリゴケの淡い光を反  
射しながら落ちていく

湖の底から拾ってきた石英

つまりは、水晶達だ

水晶は、死体に触れると同時に軽い破裂音を立てて碎ける

・・・細かいほうが、都合がいいのだがどこか不安な幸先だ

水晶には破邪の力がある、と言われている  
厄除けなどに多用されるのはその為だとか

今のは死を退ける願いを込めてみたが、まあ予想通り全滅だ



微量ではあるが願いを叶えようとする力が働いた事を確認し  
その力が、魔力だろうと仮定する  
次が本番だ

本当は詠唱でもすればかつこいいのかもしれないが、私にそんなセンスは無い

なので、過程を詠唱の代わりにしようと思う

ポケットから大粒の石英を取り出す

それに、私の血をかける必要がある

ナイフなどは持っていないので、親指の皮を歯で食いちぎる  
鈍い痛みと熱が親指に集まるが、死んだ時ほどじゃない

滲む様に湧き出た紅を、石英へ満遍なく塗りこんでいく  
血で滑る水晶の完成だ

これが、死体の核兼心臓となる

その核を死体の口に含ませて、心臓の位置に手を乗せる  
深呼吸を一つしてから、魂を呼び戻すイメージと石英が死体の身体に馴染むイメージ

死体の身体に積もった石英の破片達が死体の血となり身体を巡り  
紅に染まった水晶は核としてその流れを補助する

自分の中でそのイメージが明確になった時、私は魔法を使った

## チート

自分の中にある何かを手を伝い漏れ出していく感覚  
心地よい疲れと引き換えに行使された魔法は、足元に大きな魔法陣  
を描いた

白く光るその陣は緻密で精確で厳かなものだった  
陣に何が書かれているか、私には読めないがその陣が死体に何らか  
の作用を及ぼしているのは感じた

ぼんやりと眺めていると少しずつ陣の色が薄くなっていく  
どうやら、魔力は供給し続けなければいけないらしい  
両手に力をこめ魔力を死体へと注いでいく

何時間、そうしていただろうか  
額の汗が顎から滑り落ちるほどの疲労を感じた頃、魔力の配給を続  
けているにも関わらず  
陣が薄く消えていった

身体のをゆつくりと抜き、地面へとへたり込む  
汗が目に入り邪魔だ

死体は・・・失礼、元死体の彼は静かに呼吸を始めていた  
どうやら成功はしたらしい

張り詰めていた糸が切れ大きな虚脱感に包まれつつも  
私は達成感に浸ることは無かった

あたりまえだ、決して破ってはいけない禁忌の魔術があんなその場のしのぎの物と呪文無し程度のイメージで  
どうにかなるはずが無い

つまりは私の実力ではなく、何かからの介入があつたと見て間違い無いだろう

案の定、私の魔力をもって行使された魔術は私の知らないものだった私の願いや目的に応じて自動的に魔術が選別、選択、作成され、実行される仕組みなのかもしれない

これで私は何の苦勞もせずにイメージ通りの魔術を使うことが出来るわけだ

しかも、代償である魔力はほぼ無限  
この世界に住む人々の魔力を全て足したものとⅡなのだから、これをチートと言わずして何と言おう

なんて人を馬鹿にしてるチート  
このレベルになると最早ただの呪いだ

願いや望みがあっけなく叶うならそれはもう願いや望みではない  
思うだけで全てが与えられても、それは少なくとも私にとっては天国ではなく地獄だ

私はこれからこの地獄の中を何年も生きていくのか  
ああ、想像するだけでも鬱だ

## 会話

「……………」

期待していた暇潰しの方法がなくなった

この世界の娯楽で期待できるものはあるだろうか？

……魔術が、生活にすら浸透していない世界では無理か

「……………は？」

いつそう、勉強でもするか

魔術の仕組み、歴史、語学……

後は、畑を作るのもいいかもしれない

チートなら、洞窟も広げられるだろう

「おれは……………」

問題は勉強方法だ

人を呼ぶ気にはならない

なら、書物か

植物の種にしても本にしても町にいけないといけない

フラグの香りしかないので、町へは行きたくない

さて、どうするか

「……………ほうたい……………おまえが？」

「ああ、起きていたのか」

考え始めると周りが見えなくなるのは悪い癖だ  
改善する気もないが

「手当てをしたのは確かに私だ  
動けるか？いや、動けないわけが無いんだが」

「あつ、ああ……痛いところは無さそうだ」

「それはそうだろう、痛覚を作った覚えはないからな。」

勝手に追加された可能性はあるか

その辺りは実験してみないと分からないか

「つく……はあ？」

「事態が飲み込めていないのか？」

しかたない、簡潔な質問なら受け付けよう」

そういうと、赤毛は目を丸くした後

なにかをかんがえこんで

「…俺はどうなったんだ？」

確かに簡潔な質問であるが

…此方が簡潔な返答ですむ質問、という意味だったんだが

まあ、いい

「お前は死んだ、死体が目の前にあったので実験した

結果として、お前は生き返ったが人間ではない……いや、人間ではあるか？」

アダムも人間ではあるか

「少々、特殊な体質の人間になったが正しいか」

「…とりあえず、治療ありがとさん？」

「礼はいい」

思考が追い付いてないだけかもしれないが  
此処で礼が出てくる奴も珍しい

もっとも、こんな事態に陥った人間は初めて見るが

「そうかあ……ここどこなんだ？」

川の下流にこんな洞窟あったか？」

「？」

川が湖に繋がっているのか、一度地下に潜っているだろうな……」

「地下……？」

「ああ… 此処は山の中腹にある洞窟だ  
山の名前は知らないが」

「此処に住んでるのか？」

心配そうな表情で、私を上から下まで見る

まあ、この姿は年相応な娘だからな

「ああ、その予定だ。

此処にはまだ来たばかりだがな」

「きた……？」

なら、見てないのかもしれないがやめた方がいいぞ？

此処には龍が住んでるかもしれないからな」

それが私だ

一瞬言おうか悩むが、すぐに結論が出た

「それは、私だ」

「………は？」

「その、龍は、私だ」

驚愕に目を見開く姿を見て、悪戯が成功した時のような  
柔らかな、喜びを感じる

表情が、怯えへ移行することは無かったので

以外といい拾い物をしたと思う

獅子では無い(前書き)

お気に入り件数100件突破  
ありがとうございます

## 獅子では無い

「えーあーうん？」

「元に戻って見せるのが一番手っ取り早いだろうが、誤って潰してもなんだからな」

湖も私が潜れる深さではないからな

「・・・頭痛くなってきた」

赤毛は頭を抱えて蹲る

安心しろ、ただの幻痛だ

この程度で処理落ちを起こされると、説明が面倒なんだが

「まずは、私が龍である事を認めてくれないと話が先に進まないんだが」

「・・・いや、疑っちゃいけないんだけどなあ？」

世界は広いし、と赤毛は呟く

ただの馬鹿かと思ったが無知を知る分だけ脳みそは柔らかいらしい

「なら進めるぞ」

「まだなんかあるのか・・・?!」

「ある。まずはお前は人間ではあるが、最初の人間・・・つまりはゴレムでもある。」

血は石英、酸素の代わりに魔力が巡る。ああ、擬態で血は出らん

核さえ壊されなければ、泥で塞げば治る。病気にもならない、寿命も無い、年もとらん

ちなみに核は私の血を吸わせたから私にしか壊せん。死にたくなったら此処に来い」

「・・」



[illegible]

赤毛がフリーズした

処理落ちしすぎて、思考が停止したらしい

やはり、馬鹿か

近寄り、目の前で手を振ってみるが反応は無い

仕方ないので、襟首を掴んで引きずる

何処へ？もちろん出口へだ

「呼吸で魔力は補えるが魔術を使うと身体を維持できなくなる可能性がある

その脳味噌で魔術師ということは無いだろうが、魔術は使うな」

フリーズしたままされるがまま地面に引きずられる、赤毛へ一方的

다

そして、出口へ着いた

朝日が眩しい

出入り口は東側なのだろうか？

昇る日を見下ろせる……眩しいが

下を見ると崖はなかなか切り立っていて、地面まで50mほどか  
目測なので、もっとあるかもしれないが  
これだけの高さが有れば十分だろう

赤毛の襟首を両手で掴み、足を肩幅に開き

渾身の力を込めて、洞窟の外へと赤毛を捨てた

叫び声が聞こえたが、おそらくは気のせいではないだろう

精神衛生上よろしくないのです、洞窟から下を見下ろすような真似は

しない

これで私が言ったことの意味も解るだろう

痛覚が無いからこそ出来る、荒業だ

馬鹿は脳味噌で理解できないのだから、身体で覚えるしかないのだ

## 投身（前書き）

ランキングなんて、幻覚だと信じている

お気に入り件数200件突破  
ありがとうございます

誤字脱字報告、感想、批評などいただければ幸いです

## 投身

騒がしい人間がいなくなると

洞窟の奥の闇が此方に迫ってきた気がした

無論、気のせいだが

体感時間は長かったが、実際に過ぎた時間は僅かだろう

それなのに、体は休みを欲していた

とても、とても、久しぶりに人と関わったからだろうか？

それとも、初めて魔術を使った影響だろうか？

そんな思考も、徐々に微睡みに侵される

視線を巡らせ、苔が密集している、場所で横になる

想像したよりも、柔らかな、感触

前世と、同じ、青い草の香りを、感じつつ、ゆっくりと瞼を……

意識が覚める

外気を感じ、掛け布団を探して手を動かす

動かしながら、今の状況を思いだし手を止めようと思う

脳の命令が未だ目覚めぬ体に届くまでの僅かな間に

指先が羽毛の感触を伝えた

幸いなことにそれを掴みにかかるという行動は防げた  
瞼を開き、視線を自分が触れたものに向ける

鳥だった

羽毛なのだから当たり前だ

白い鳥だ

いや、白ではなく白銀

ただ、光の加減で見える色は灰色ではなく青だ  
ミスリル色がもっとも、正しいだろうか？

羽も所々青が混じっている

翼を広げた姿はさぞ、美しいだろう

大きさもすごい

下手をしたら、龍の私よりも大きいのではないだろうか  
私が触れたのは彼女（もしくは、彼）の胸元に生えたふんわりした  
羽のようだ

彼女は、私を見下ろす

その瞳は青だ、澄みきった冬の空のような青  
私と視線が絡まる

彼女は、私を警戒してはいないようだ  
此処は恐らく、彼女の寢床なのだろう  
こんな好条件な洞窟、先住民がいない方がおかしい  
今まで出会わなかったのは私が湖で気が向いた時に寝ていたからか

私は彼女をおどろかさないうつ、ゆつくりと彼女から手を離しその  
ままの速度で立ち上がる

「住みかを盗るつもりはない、すまなかった。

一日、置いていただき感謝する」

私は彼女へ、一礼するとこの洞窟を去ろうと行動に移す

赤毛のように飛び降りるには、私には度胸が足りない

飛ぶのは目立つ……

かといって、他の方法を探すほど

ここで時間を過ごす訳にはいかないだろう

仕方ないので、私は空を見上げながら

外へ一歩踏み出した

## 神鳥（前書き）

お気に入り登録500件突破  
ありがとうございます

ランキングなんて見えない

## 神鳥

落下までの間に羽のみ広げられるといい

そんな思考と共に踏み出した一步は、確かに空を掻いて

崩れた姿勢は宙に放りだされずに首を絞めるという結果をもたらすに止まった

後ろ首の服を捕まれ、乱暴に洞窟に引き戻されたせいでバランスが取れず尻餅をつく

気道が絞まったのか咳が止まらない

呼吸は必要としないくせに、急所の要素は果たすらしい

「返事も聞かずに、どこへ行く気だ。龍の娘」  
黙れ

反射的に言おうとしたが、出てきたのはやはり咳だった

呼び方が龍の娘だと、まるで私が龍の子供のようではないか  
この世界の龍は今、私しか居ないというのに

わき腹が痛み出した頃、ようやく呼吸も落ち着き  
涙で霞んでいた視界を拭う

見上げる位置に居たのは目つきの悪い男だ

髪はミスリル、瞳は青

周りに鳥が居ないところを見ると、こいつが先ほどの鳥らしい  
野郎だったのか

「何か用か」

睨み上げ、吐き捨てるように言う



見下げられているのが嫌で立ち上がる  
そのまま、先ほどまで寝ていた苔の密集地に足を踏み入れる  
明るい

「人の巢に踏み込んでおいて、その態度か」  
「出て行こうとしたのに、止めたのはお前だ。招かれた身で何を遠慮する必要がある」

客に対する態度がなっていないのはそちらだろうか？」  
「はっ、何を馬鹿げたことを」  
どこの貴族の会話だ

距離をとりたいのに、鳥はついて来るといつか詰め寄ってくる

「：用がないなら、早く出て行きたいんだが」  
海底に行きたい

「用ならある、お前に使命について説明する」  
「ああ、神の使命？」  
「そうだ」

とても、偉そうに大袈裟に頷かれる

「それなら、知っている。説明など必要ない」  
「大まかな流れだけだろう？手段を説明する必要がある  
今、お前がやるべき事だな」  
「必要無い、知っている分かっている」  
ため息混じりに投げやりに返答をする  
説明など、聞き流すだけなのでするだけ無駄だ

「なら、なぜ狩に行かない？」  
今の時間は夜のようだ  
空の月は一つだけ、片方は新月なのだろうか

「今は選り好みをする時期では無い  
無論、知識を蓄えた貴族が最も良いがその貴族に近づくためにも  
まずは平民だろう」

空を飛びたい

元々あまり上手くは無かったが、水泳は好きだった  
水を進むよりも抵抗は無いが、空気を切って進むのもまた心地良い

「聞いているのか?！」

あつ、赤毛

頭だけを入り口から覗かせて、こちらを見ている  
崖を上ってきたのか

まあ、疲れ知らずではあるから不可能ではないか

手を振ってこちらに来るなと伝えるが、何故か上半身を覗かせる  
登ってどうする

「耳には入っている」

鳥へ返答しつつ、赤毛を眺める

鳥は入り口へ背を向けているからか、赤毛に気づかない  
おかげで私の視界には二人とも入っているんだが

「脳に入れるっ!」

足元の苔に霜が降りる

私の息が白くなり

肌が気温の変化を伝える

怒ると寒くなるのか  
また、テンプレな

「碌な話で無いのが分かっているのに、どうして記憶する必要がある」

言った瞬間、胸倉を掴まれる

また、息苦しい

赤毛が視界に入らない

距離が近いからか、相手の怒りが瞳を通じて伝わってきて  
わずらわしい

「お前はっ、この世界を」

続きは聞かずにすんだ

鳥の手から力が抜け私に倒れこんでくる前に、後ろから引かれたの  
か私から遠のく

「大丈夫か?!」

大丈夫だから、鳥を踏むな赤毛おひつよし

羽毛が汚れたら、布団を作るのが大変だろう？

## 契約

「それで、赤毛は何をしに来たんだ？」

「…おい、会話の途中で叩き落しといてそりやねえだろ。」

飽きた視線をこちらに寄越されるが、私の視線は鳥へと向かう。先ほど、赤毛に踏まれた背中にくつきりと土屑の足跡が付いている。なまじ服が白く、そして土が赤い為とても、目立つ。ああ、羽毛が…。

「会話の途中で、フリーズしたのはそちらだろう？ああ、痛覚はきちんと無かったか？」

「あつたら、此処に来てねえよっ！！」

確かに、痛みがあつたら今頃ショック死だろう。よくて、寝込んでいるだろうな。

幾ら不老で怪我はほぼ無限回復し病気もしないとは言え不死ではない。魂が死を認識してしまえば、死ぬ。

そう考えると、魂を直接えぐるような精神攻撃や幻覚には弱いのか。これ以上チートにする気も無いが、何処までチートに出来るかは少し興味がある。しないが。ああ、我慢するとも。……本人が許可してくれないか？いっそ、何処まで精神汚染に耐えられるか試してみるのも今後の彼の人生にとって大変有意義になるとは思わないか？いや、きつとなるはず。なるにきまつている…

「…妙にきらきらした目でこっち見んな。無表情だし。てか、俺の冷や汗がとまんねえんだけど何考えてんだよ、龍。」

「龍は種族であつて名前ではない。失礼な奴だ。」

「人のこと赤毛呼ばわりしている奴に言われたくねえよっ。俺の名前はアレンだっ！」

…確かに、人を外見で判断するのは失礼だ。

「すまなかつたな、馬。」

「どっから来たんだよ、そのあだ名。」

「鹿のほうが好きか？」

「…実は喧嘩売ってんのか？わざとだよな？頼むからわざとと言つてくれ。」

短時間で怒りから懇願へと変わるだなんて、珍しい奴だ。

しかもこちらが首をかしげていると、空を仰いで頭をかいた。

その後、視線に込められた感情は諦めで口元に浮かべるは苦笑だ。

本当に、変わっている。

「とりあえず、此処に居んの危ないからさ。もう騎士の連中に見つかつてるしさ……これでも急いできたつもりなんだがなあ？」

「騎士？」

「いったい、何の話だ？」

もう一度首を傾げると、油を差していないからくり人形のようにぎこちない動きで馬鹿が鳥を見る。

「……こいつ、騎士だよな？こんな上等な服着てるし。」

「いや、それは騎士ではないぞ？」

神獣だからな。使徒でもいいが……天使は違うか。

どう説明しようかと悩んでいると、その間に馬鹿が鳥の肩を掴み激しく振り始める

「おいっ！おきろ、起きてくれっ！！頼む、同じ龍の犠牲者を俺に殺させないでくれっ！」

「どういう意味だ……。」

私の呟きは馬鹿……もとい、自称犠牲者一号には届かない。

素晴らしいな、この短い間に幾つもの称号を得るとは……一号、侮れ

ん。

「…う。」

「おいっ！」

「……………ああ、ままん……………今、行くよ。」

「にぎ………うっ………！」

ママンって……………初めて聞いた。

他称犠牲者二号が再び気絶すると一号が叫びつつも、柔らかな苔の上に二号を横たえる。

茶番劇、もしくは寸劇を繰り広げている一号、二号を眺めとても相性がよさそうだと感想を抱く。

そうだ……………とても、良いことを思いついた。

あたりを見渡し、手ごろな石を一つ手に取る。

「一号、二号を助けたいか？」

「……………一応な、怪我させたの俺だし。てか、お前の知り合いじゃないのか？」

「いや、今日が初対面だ。」

「……………やっぱ、騎士なんじゃね？こいつ。」

一号は二号へ不信感を抱きつつ、きちんと脈を測ったり殴った後頭部の様子を見たりしている。お人よしめ

「なら、二号が起きたら一言も喋るな。」

「…それが、傷の手当てと何の関係があるんだ？」

「そうしないと。」

「しないと？」

「私が、二号を煮る。」

さぞかし良い出汁が取れるだろう。

「なんつう、脅し文句……別に黙るぐらい良いんだけどさあ。」  
「……うう。」

先ほどよりも、大きな呻き声。どうやら目覚めるようだ。  
視線で、一号を黙らせ二号を見下ろす。

「起きたか？」

「……娘……？……何が起きて……。」

ゆっくりと起き上がり、痛むのか後頭部を擦る二号。視界に一号が映ると、汚物でも見るかのように眉間に皺が寄る。

「何故人間が、こんなところに居る……。」

先ほど私へ怒っていた声よりもさらに一オクターブ低い、地を這うような声で呟く。

一号は二号に睨まれ、蛇に睨まれた蛙のようだが……残念ながら、今此処には私が居る。

「何故とは酷いな。折角お前を助けてくれたのに……誇り高き神の使徒が命の恩人に対してその態度とは嘆かわしい。」

「……恩人、だと？」

さすがは、誇り高い神の使徒かつこわら。倦厭感と馬鹿にした感情がにじみ出る口調ではあるが食いついた。

「そうとも。私がお前のことをこの石で殴った後、あまりにも煩わしいので外へ捨てたんだがな。」

受身も取れず怪我をしたお前を、崖の下で必死に治療していたんだぞ？

その姿があまりにも必死だったので、お前達を此処へ呼び治療をしたんだ。」

「……人間が、私の治療を？」

一号が滝汗を流しつつ、視線で必死に何かを伝えようとしている

が意図的に無視をする。

二号は人を嫌っているせいか、そんな一号と私の微妙なやり取りを読み取ることが出来ないようだ。

「そうだ。神の使徒、慈悲深く気高き者としては恩は恩でかえさねばなるまい？」

「……そうだな。……おい、人間。何が望みだ？金でも宝石でも名誉でも力でもくれてやろう。」

何せ、私の命分の価値のあるもの達だからな。どれも人の身では十分すぎるものだろう？」

「……………」

一号は答えない。正確には、答えられないが正しい。一瞬口を開きかけたが、私が持っている石を握力で砂にしてみせるとすぐさま口を閉じた。

視線と雰囲気は『いらねええええつ！』と、叫んでいるが空気がよめな……人の機微に疎い二号にはそれは伝わらない。

「どうした？望みを言え。」

何時まで立つても、望みを口にしない一号の様子に、二号が焦れはじめる。

そろそろ、頃合か。

「……何をケチな事を言っているんだ？」

「……ケチ、だと？」

「ケチだろう。自分の命の代わりに物を渡してすますなど。命には命を持って報いるしかあるまい。」

「……どういうことだ？」

神獣とはこんなに、騙され易くていいのだろうか。騙す側としてはとても不安になる。



「契約だ。」

「…人間の使い魔になれとっ!!」

ふうん、契約は不平等なのか。使い魔も存在するらしい…他にも神獣が居るのだろうか？

「考えてみる、人間の寿命は長くて100年。冒険者はもつと早死にするだろう？ たった、20年だ。命の恩を正しく返すならば妥当な線だろう？」

「たしかに…二十年程度なら妥当か…。」

「そう、そこであえて契約期間を年単位で決めるのではなく、死ぬまでと定めれば器の大きさを他の神獣達へ知らしめることが出来るだろう？」

「……だが、人間ごとくと…契約など。」

「人間の食べ物は美味いぞ。」

「……うむ」

「それにこいつは名声がある訳でもない、ただの冒険者だ。神獣をこき使うなど出来やしないさ。」

「…なるほど、逆に小間使いを得たと考えるのか。」

「それも、高々20年。冒険者の魔力では神獣をしたがえるなど無理だろう？ 精々平等がいいところだ。」

「…命令の危険はないか。………よし、冒険者お前と契約してやろう。」

一号は汗を流しすぎたのか顔が青くなっている。さすがに其処まで露骨な変化があると解るのか、二号も不思議そうに首を傾げる。

「おい、どうしたんだ？ 冒険者？」

「あまりの光栄に声も出ないほどの歓喜に包まれているようだ。」

「…嬉しいと、人間は赤くなるのではないのか？」

「いや、あまりに嬉しいと青くなるんだ。」

「そうか…それほどまでに嬉しいか。……さあ、早く名を告げよ。」

言われるも、一号は口を割らない。なるほど、最後の抵抗か。  
無駄だが。

「この冒険者の名前はアレンというようだぞ？名さえ解ればこれだけの力差だ、契約は結べるだろう？」

「無論だ…っ！冒険者アレン。氷鳥はお前の矛となり、盾となり、アレンが死すその時まで苦楽を共にすると此処に誓おうっ！！」

二号の宣誓と共に光の渦が弾けた様に、あたりが白に塗り潰された。

## 弱体化

光が収まり視力が再び夜の暗闇に慣れると、口を半開きにして間抜け面をさらす一号と鳩が居た。…恐らくはあの白い鳩が氷鳥なのだろう。

やはり同意無く、契約魔術と言うのは結べないものなのだろうか？僕にする魔術が同意前提ならそれは大変良心的だが…なにせ人間が作る魔術だ、力で押し伏せる事も出来そうだ。

今回は魔力単体ではたしかに一号は雑魚であるが、一応立場は私の着属的な何かだろう。潜在的な魔力も含めて考えるのならば力技が利かないのも納得できる。

中途半端な形ではあるとはいえ、氷鳥が契約できたのは素晴らしい結果だと思っただ方がいいのか。

「…な、何が起こった。」

小さくなったからか、声も低いイケメンボイスから声変わり前の少年ボイスになっている。それでも確かに良い声ではあるが。エロさが足りん。

「中途半端に契約が結ばれたようだな。おめでとう、これで命令される事は無いぞ。」

「こ……この姿は一体…。」

「力技だったからか一号と二号の繋がりが通常よりも深くなった結果だろう？」

「…一号？二号？」

「……ずいぶんちまつこくなつたなあ。」

一号はこちらの話を聞いていないのだからいいのだろうか？小さいものが好きなのか？触りたさそうに手ををわきわきと動かすのは目

に毒だから止めて欲しい。

「つまり、一号の強さが〃で二号の強さになっているのだろう？基準が一号であるのは元が契約呪文であり、主と呼ばれる立場だからだろうな。」

何が判断基準になっているのかは知らないが。

後は、一号が二号に魔力を渡さなければいけないが足りていないや、下剋上されないように魔術にストッパーが仕組まれていた。なんていう可能性もあるが、言う必要は無いだろう。

「……人化も出来ない……。魔力も極端に無くなっている……。これではただの鳩ではないかつ！」

「いや、普通の鳩は喋らないだろ。」

「黙れ人間っ！貴様が雑魚であるのが悪いのだっ！！」

いや、元の原因は安易に契約を結んだ二号にあると私は思う。

鳩の姿でも飛ぶことに支障は無いのか、一号の頭に飛び移ると米神にその鋭い嘴を連続して叩きこんでいく。一号、軽く血を流して痛みがりながらなぜそんなに嬉しそうなんだ。

「まあ待て、二号。八つ当たりをした所でその魔力が元に戻るわけではあるまい？」

「そもそも、貴様が妙な事を言い始めるのが悪いのだっ！借りの原因は貴様だろうっ！！」

「私もこのような事態になるのは、予測していなかったから……だが、解決方法が無いわけでは無い。」

「なんだとっ！！」

翼を広げて驚愕を表す二号。芸が細かいな。

「強さが足りないのならば、鍛えれば問題ないだろう？一号が強くなれば自然と二号の魔力も戻るはずだ。」

「…なるほど……だが、鍛えた所で雑魚は雑魚。人間の限界点はあるだろう？ そうだ、いつそ此処で殺してしまえば契約も解除になるのでは？」

「いや、成長限界はかなり高いはずだ。なにせ力技とは言え二号と契約出来たのだからな…、少なくとも元の氷鳥に戻る程度の成長は見込めるはずだ。」

殺すのは止めておいた方がいい、魔力に影響するほど深く繋がっているのだ。片方が死んだとき何が起こるか分からないからな…下手をすると永遠に失われた魔力が戻らないかもしれない。」

何より、私が作った眷属<sup>ゴレム</sup>だ。人間の成長スピードと同じにしてくれるのは困る。

「…二十年でたりるか……？」

「人間の寿命自体はもつと先だろう、それまで守れば良い。」

「そうか……しかたあるまい。この姿が元に戻るまでの我慢だ。だが、この姿でどう守れば……。」

確かに鳩では盾にもなれないだろう。かといって安全圏での成長スピードでは何時になっても元には戻れないだろうからな。

「そうだな……日に十分だけなら元に戻れるかもしれん……。今此処で結ばれた縁を利用して私の魔力を一時的に一号に貸せるようにしてみよう。全てを渡してしまえば破裂してしまうかもしれないからな、ほんの少しだけだが。」

実際は創造主権限だが。

「なるほど、それは良い安全装置になりそうだ……何から何まで、感謝する。」

「……なあ、何時まで俺の頭の上に居るんだ？」

呟いた一号の頭には包帯が巻かれている。話についていけない間に手当てをしたらしい。もっとも、余計な口を聞いたせいでまた鳩

に突かれているが。

「だが、人を鍛えるなど初めてだ……何から始めればいいか……見当もつかない。」

「そうだな、まずは経験を積ませればいいだろう。強敵と戦わせるなどな。」

「えっ……何その俺の死亡フラ」

「確かに実践は大切だからな。人間っ、お前の思いつく最強とは誰だ？」

「……えっ、あー………おかん？」

明らかに時間稼ぎだが、まあ、此处で指摘してはやるまい。

「それでは今から会いに行くぞっ！……早速魔力を貸してくれ。」

「了解だ……トイチでいいからな。」

「ちよつまっ……」

「といち？合言葉か……？」

「いや、合言葉は助けてどら………いや、龍の血の加護を、だな。」

「わかった……龍の血の加護をつ！」

「俺を潰す気かあああっ……！！」

二号が高々と叫ぶと、鳩の体が光に包まれる。一号が慌てて頭の上の光の塊の二号を掴み、出口へと全力で投げる。光の塊は放物線を描き崖の下へと落下して行った。

「ていうか、龍っ！十一<sup>トイチ</sup>ってどういうことだ？！」

「十日に一割の略だ。」

「知ってるから突っ込んでんだろがあ……！！」

「まあ、冗談だ。旅先で面白そうな話やお土産、本を持ってきてくれるならそれでいい。私としてもすぐに一号に死なれたくは無いらな。」

まだ、実験が済んでいないのに他者の手で壊れられるのは困る。

何か言おうと一号が口を開こうとするが、それは冷風にさえぎられる。

出入り口を見ると、最初に見たときよりは小さな…と言っても4mはあるか。そんな氷鳥が空を飛んでいた。

「人間っ！何をするっ！」

「でかつ、そんなデカイのに俺の上で変身すんなよっ！！」

「人間に指図される覚えは無いっ。さあ、時間が無い。早く、おかんの元へと行くぞ！！」

二号はそうまくしたてると、器用に飛んだまま洞窟の中に入ると一号の肩を足で掴む。

「ちよっ、食いこんでる食いこんでる。俺の肩に爪があっ！」

「我慢しろ。さあ、行くぞっ！！」

その扱いだと本当に人間だったらずくに死にそうだ。

別れの言葉を言う暇もなく、二号は一号を掴んで空へと旅立っていった。高所恐怖症ならトラウマ物の体験をするであろう一号も災難だ。

恐らくは二号も焦っているのだろう、突然の事態に。それを考えると、あの状態で鳩を愛でていた一号は何なのだろう。変態か。

まあ、そんな思考は一人になってからすれば良い。

溜息を一つついてから、私は洞窟の奥へと向き直った。

## 騎士（前書き）

何時の間にか、お気に入り件数1000件突破  
ありがとうございます



## 騎士

「さあ、そろそろ出てきたらどうだ？…騎士とやら。」

洞窟の奥へと声を張る。

軽い残響が消え、辺りが沈黙に包まれた時此方へ踏み出す影があった。

「……………そんなに、睨まないでくださいよ。私は穏便に済ませたいのですから。」

「穏便？…本当にそうなら、態々湖からは来ないだろう？玄関は、あちらだ。」

そういつて出入り口を指差す。

「ああ、あんな大きな入り口があったのですね。……………すみません、私は此方のルートしか知らないもので。」

そういつて此方に近づいてくる影は人の形をしていた。

赤を基調とした鎧に身を包むその肩には双頭の蛇が刻まれている。

「…不思議だな。なぜそちらのルートを知っているんだ？」

「いえいえ、アレンさんに聞いたもので。」

「ならば余計だ、一号はあちらの比較的安全な出入り口を知っている……………ああ、そうか。」

「……………どうなさいましたか？」

「いや、嘘はついていないのだろうと思ってな。」

「ええ、騎士は嘘をつかない物ですから。」

「ああ、それでいて非常に人間らしい……………」

まずいな、少し気に入ってしまったいそうだ。

そうなったら、一号は怒るだろうか？

「それはそうと、お嬢さん。神鳥様はどこへ行つたのですか？」

「おかんの元へだろう？」

「いつお歸りに？」

「さあ？」

倒せるまで歸つてこないつもりなら一生歸つてこない気もする。  
いや、母親には寿命があるか。

「そうですか……待たせてもらつてもいいですか？」  
何年待つ気だ。

「嫌だと言つたら？」

「申し訳ありませんが、待たせていただきます。」

その場合はあなたが逃げないように拘束もさせて頂きます。」

張り付いたような笑顔でなかなか物騒なことを言う。私を人質に  
でもする気なのだろうか？

人の身で私に挑むなど自殺行為でしかないが。

「一択ならばいちいち聞くな……あの鳥に何の用だ？」

「いえ、少々……」

「少々？」

「死んでいただくと思ひまして。」

口調はあくまでも軽く、視線は射殺するように鋭く。

何をしたんだろうか、鳩。

改めて、騎士の足の先から頭まで見る。髪は茶色か、瞳も茶色……駄  
目だな、主人公オーラが無い。

なら、死亡フラグは折れないだろう。

「死ぬぞ？ いや、死よりも酷いことになるのか。」

「主のためならば、本望です。」

「……主……その、術をかけた人間か？」

「……………そんなことまで分かるのですか？」

「詳しい内容は分からないがな。」

歪みが酷いからな。

術というよりは呪いか、人間の思いの強さには本当に呆れる。

「それなら、協力してください。彼らは貴方を信頼しているようでした。」

あるいは神鳥を殺せるかもしれません。」

「そこまでして、何をしたい…？」

「世界への復讐を。」

また、大きく出たな。

…さて、此処まで聞いたらただでは帰ってくれないだろうし帰してもくれないだろう。

まあ、狙って聞いた感はあるが……さて。

「お前の願いを聞いても良い。」

「……なんですか？」

「私の願いを聞き、更にお前が代償を払うというのなら私はお前の願いを叶えよう。」

「……………それは、神鳥の死ですか？」

「いや、世界への復讐だ。……正確には、運命へのだが……そちらのほうは、良いのだろうか？」

私が問いかけると騎士は少し戸惑った後、頷いた。

口角が自然と上がる。胸の内から湧き上がるこの衝動はなんだろう？

「では、まずは条件を。私の願いは世界を救うこと。代償は死後のお前の魂。」

そのかわり……」

「私の願いを叶えると。」

「ああ、必ずその願いを叶えよう。」

魂を要求するなど、まるで悪魔のようだと思わず苦笑する。  
私にとっては全てが茶番劇のようだが、少なくとも騎士はとも真剣だ。

「何に誓いますか？私はこの呪いにかけて。」

「ならば私は……この名にかけて。」

張り詰めた空気の中、そう誓う。

私が今持っている物の中で一番大切なものに誓ったのは、私も少し空気によっているのだろうか？

「……良いでしょう。それで私は何をすればいいのでしょうか？」

「まずは……。」

私の言葉を待つ騎士へとびっきりの笑顔を向けて私は言おう。

「アレンを殺して来い。」

ようやく、静かになった。

肺に溜まった生暖かい空気を吐き出し、よく冷えた空気を吸う。  
やるべき事は沢山あるが、私はまずはそれらを全て投げ出す。ベッ

ド代わりの苔の上へ四肢を放り出し、淡く光る天井を見上げる。

動き始めてしまった。

動かし始めてしまった。

使命を 死命を 果たすために。

運命を 生命を 紡ぐために。

神を気取る為の、命を生きる為の、誰かを操る為の、誰かを殺す為の、意思も無いのに。

人間を気取る為の、死を選ぶ為の、自分が操られる為の、誰かを生かす為の、度胸も無いというのに。

そんな人間に何も護れはしないと、私の経験はいは囁く。

そんな人間は全てを失うのだと、私の心たましいが笑う。

それらの声を私は理性で押し殺す。

私がやっている事は他者から見てどう見えるのだろうか？

全てを知る人間など、神でも居ないだろうが。

取り留めの無い思考の中で、私の意識は一時の休息を求めて沈む

## 治療（前書き）

なるべく簡潔にしましたが、多少痛々しい描写があります

## 治療

一号と二号、騎士が居なくなってから、7回昼と夜が入れ替わった。今は月が満ちて行く時期らしく夜はとても明るい。2つの月の月齢は2と3離れている程度だ。これなら、片方が新月の時には空を飛べそうだ。

ちなみに今は寝待ち月程度だ。やくまんげつ 氷鳥の時は三日月と新月だったと思う。…月の満ち欠けの周期が同じらしい。これで湖で時間を潰しても、後で何日経ったか大雑把に考える事も出来そうだ。洞窟の中で、自分が生活するのに必要な基準を作っていく。

8回目の昼、一号と二号がボロボロでやってきた。もつとも一号は服が破れているだけで、怪我をしているのは主に二号だが。1つと1匹は空から洞窟に辿りついた瞬間、入口近くで崩れ落ちた。大きくなくなっていた二号も鳩の姿に戻る。

原因には心当たりがあり過ぎる程度にあるが、間違っている可能性もある。声をかけずに歩み寄ると洞窟の中で仰向けに倒れこんでいる一号の腹を踏みつける。まあ、潰れる音はしなかったので大丈夫だろう。

「どうした？人間は玄関で倒れるのが礼儀なのか？ああ、もしかそれは五体投地なのか。それにしては姿勢が崩れているぞ？」

「ごたいとうちって…なんだ……？てか龍、リョートの治療……。」

「仮にも神獣だろう？怪我ぐらい自分で治せ。」

一号に言いながら、視線を二号に向ける。

呼吸は浅く、主に傷ついているのは胸か。泡混じりの血が出ているので、肺が傷ついているのかもしれない。

……治す気配が無い所を見ると、魔力が足りないのかもしれない。  
あの傷では、私の魔力を借りる事も出来なさそうだ。  
あの騎士、狙ってやったのだろうか？それならなかなか良い仕事をする。

「しかたない。」

魔術は使いたくない。右手の親指の治った傷を歯で抉りそれなりの出血をさせる。体の熱が傷口に集まっているかのように親指が熱く、ついでに痛みももたらす。

熱を魔力と仮定すれば血に魔力を宿すのはそう難しい事ではないだろう。懸念は血液型だがまあ龍の血はどうにかなるだろう。

弱り方を見ると、あまり時間はなさそうだ。血を吸収してから魔力に変換してては間に合わないかもしれない、直接傷口に塗りこむか。

一号の上から足を退け、左手で2号の胸を掴み持ち上げる。そのさい、二号が呻いた気がしたが気のせいだと言う事にする。そのまゝ、一号の視界に入らない場所に移動する。

右手の親指が十分に血に濡れた事を確認し、その親指を二号の傷口の中に入れる。

なるほど、北に住む外国人はアザラシの内臓で暖を取ると言う話を聞いた時はデマかと思ったが案外、事実なのかもしれない。そう思う程度に、生きた二号の中は生き物相当に温かった。

十分に自分の血を二号に擦り付けてから、指を引き抜く。

幸いなことに、声を出す余裕もなかったのか気絶したのか二号の反応は時折痙攣するにとどまった。傷口を見ると自己修復が開始されている。これなら肺も治りつつあるだろう、懸念が一つ消えた。

「……おい？何が起こってるんだ？」



「治療が終わった。お前は必要ないな？」

「あー、此処に来る途中で沼に落つことされたから平気だな。」

「便利な体だな。」

「おかげさまで。」

二号を一号の腹に投げ、右手の二号の血を見る。

仮にも神獣の血だ、このまま洗い流すにはもったいないだろう。どうするか……。

「何か土産は無いのか？」

食べ物の土産があれば、その入れ物なり瓶に入れば良いと、軽い気持ちで聞く。

「この状態でそれ聞くか？！……あー、今あんのはこれだけだな、残りは家ごと吹っ飛んだ。」

そう言つて一号は、ポケットから銀色のペンダントを取り出すとこちらへ投げよこした。反射的に右手で受け取ってしまい……、しまったと思つた時には遅かった。

銀はミスリル程ではないが魔力伝導率が良い物体だ。そんな物に魔力を込めた龍の血と氷鳥の血が付いたらどうなるか。

ペンダントは、脈打つように私の手に付いた血を全て吸い取るとペンダントトップであつた青いガラス球を赤へと変貌させる。

魔具、それも相当高位であるう魔具の完成だ。鑑定してみないと効果は分からないが、何やら禍々しい雰囲気放っている。もともとそういう素質があつたのかもしれない。

「……このペンダント何処で手に入れた？」

「露店。銀製にしては安かつたしついでに携帯食料も貰えたからな。多少怪しかった様な気はすんけど龍に渡すもんだし平気だろ？」

「そんな物を土産によこすな。」

一号の常識を疑う。

…この物はどうするか、その辺に捨てても戻ってきそうで怖い。しょうがないので、身につける。が、実用重視な冒険者の服にこれでもかと言うほど似合っていない。ペンダントトップを服の中に入れると露出するのは銀色の鎖のみとなる…これで少しはましだろう。良いタイミングで、二号が呻きだす。どうやら本当に気絶していたようだ。

さて

「それでは、何があったか話して貰おうか。」

話をまとめると、一号の実家でごろごろしていると騎士に襲われたそうだ。

反撃するものの技量は相手が完全に上、実家を半壊に追いやった戦闘は一号達の逃走で幕を閉めたそうだ。二号の傷は、逃走に転ずる一瞬の隙を突かれた物らしい。

「あいつ、なんか俺に恨みでもあんのかあ？一度目と言いい二度目と言いさあ。」

「力さえ、魔力さえ戻っていれば人間ごときに負けるはずが無かつ

たが…っ！」

「実家は平気なのか？」

「戦闘でリョートの羽根が散らばってたし。それ売りやあ家の一軒ぐらいたつだろ。それよか騎士だよ、あのストーカー。」

「これからも、付きまとわれる可能性があるからな…はやく、強くなるのだアレン！」

「だからな、吟遊詩人の英雄伝じゃあるまいし。そうそう、早く強くはならないって。筋トレとかは欠かさずやってるけどさあ……。」  
地味な努力だな。

まあ、魔物の魂を吸収してどうの…と言う法則は無いのだから仕方ないと言えば仕方ない。

「後は、武器で強くなるという手もある。」

「あるっちゃあるけどなあ……リョートの羽根全部もいで良いなら、最上級の武具は揃うぞ？」

「却下に決まっておろうつ…！」

「仮にやったって、限界があるからなあ。どうやったって国宝なんかは金積んだ程度じゃもらえないし。」

「…国宝は強いのか？」

「そりゃ強いだろ、国宝だし。」

たまに偽物が祭られている事もあるがな。そう思うも口には出さない。騎士が良いライバルになればと思い、けしかけたが思いのほか技術に差があつたか。

それでも逃げられるのなら問題ないか。

「後は地道に依頼かねえ。沼地だったら怪我とか気にせずに出来るわけだし。」

「…うむ、それも仕方ないか。沼地と言うと、東か？」

「そうだな、討伐系の依頼は東の方が多いし。」

「今度は、土産を忘れるなよ。」

「ペンダントやっただろっ！」

呪われた、な。

あんなものはお土産とは言わない。

そしてお前ら、外はもう日が落ちたが泊って行くつもりなのか？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2659y/>

---

灰の龍は退屈が嫌い

2011年11月24日12時45分発行